



最近、「いのち」が見えにくい時代になってきてしまったな、と思うことが多い。特に人間の「いのち」が見えなくなったことは悲しいことだと思う。

このことは葬儀において痛感することが多いが、病に伏せれば病院へ、そしてやがては施設へと「いのち」のルートは決まってくる。亡くなればそのままセシモニーホールへ直行となり、いつしか家に帰ることもなく「いのち」は消えていく。すべてが流れるように進められ、手間も、煩わしさも感じることはない。

かつての家庭では、家族全員が一つの「いのち」を見つめながら看病をしたものだった。刻々と変わりゆく容体を息をのみながら見守り、ついに亡くなれば号泣となり、様々な思いで手を合わせ、次第に冷たくなっていく体を拭きながら、しっかりと死の現実を受け止めたものだった。

戦後72年。一億総活躍時代、GDP600兆円云々などと、いまだ「足ることを知らない」貪欲な夢は開き続け、一方で様々に残虐な事件や奇怪な事件、不道德な事件が続発している。この現実「いのち」を忘れた日本人の心の悲鳴でもあり、貪欲さの延長線上にあることを忘れてはならない。

## 戦没者追悼会「営まれる」：八月十五日 九時より 光受寺本堂にて

戦後七十二年、未だ癒えない悲惨で無念な思いと、平和への強い願いが、五十年を超えた今もこつとして法要を営ませている。亡くなければならない、というよりもせすにはおられない、という切なる思いがここにはある。

遺族は高齢化が進み、世話をしてくださる方にも大変な負担となってきた現実にあつて、この会の存続も何度か危うい状況があつたようだ。しかし配偶者から子へ子から孫へと心は受け継がれてきた。この日雨が降つたにもかかわらず、2、3名の欠席があつただけだということだつた。



法要の後は、法話をさせていただきました。

毎年のごとなので、話の内容も同じような話とはなりませんが、通常に行う法話の雰囲気とは異なり、皆さんどこか特別な思いをもつて聞いていただいているようでした。

本年には墓地に建てられていた忠魂碑も、耐震の関係で取り壊され、何となくさみしい思いも残っているようですが、この会そのものは存続されていくような御意思がほとんどの会員におありのようでした。

一触即発の気配が漂うアメリカと北朝鮮との関係に巻き込まれなければいいのですが、心配なことです。

## 今月の掲示板

### 兵戈無用



天下和順 てんげわじゅん 日月清明 ちちがつしよつみやう 風雨以時 ふううにじ 災厲不起 さいれいふき 国豊民安 くにふみんあん 兵戈無用 ひよびがむよう 『 伝説無量寿経 』

お釈迦様のお説きになる 兵士も武器もいらぬ世界は、決して実現不可能ではないはずですが、ただ戦後72年、あの悲惨な戦争は決して繰り返してはならないと分かっているのです。縁があれば何をしてもかすかわからない危しき「を言ひ出されしるの」です。

# いのちを見つめて 金子みすゞの世界

大正時代末期から昭和時代初期にかけて活躍した日本の童謡詩人。本名は金子テヲ。二十六歳で死去するまでに五百余編もの詩を綴ったとされている。

生きとし生けるものの「いのち」を見つめる優しい眼差しにみすゞ独特の世界観を感じることが出来る。

かつて光受寺において、詩の朗読会を開いたことがありますが、今回改めて「こ」で紹介したいと思います。

それは本紙トップ記事にもありますように、「こ」のちが「見えな」と「こ」の危機感を年々「こ」強めているからです。人間だけがこの地球で我が物顔に生き、動物のいのちも単なる商品としてしか見えず、また人間のいのちさえも、単なる物体としてしか見れなくなっているような気がしてならないからです。

今一度、彼女の眼を通して、見えない「こ」の尊厳と目を向けただけだったらと思うからなのです。



## 極楽浄土

時々、極楽浄土はあるのか？という質問をいただくことがあります。私の答えは、YESです。ただ、皆さんの多くは極楽浄土が死後の世界だと思っ

ています。極楽浄土は悟りの世界です。悟りと言わなくても、どこか来ないと思えますが、平たく言えば、争いも憂いも無く慈悲に溢れた美しい世界です。その世界は、今生きている私達が理想と掲げて生きていかなければならない世界です。もし、そうでなければ一生、思い通りにならないことへの苦みや、他人への恨み辛みを抱えたまま生きていかなければなりません。それは人と人が傷つけ合う世界です。その世界を地獄と言います。でも、そんな毎日の中にも、時々人の優しさや愛に癒されることがあります。それは慈悲の世界、つまり極楽浄土の世界です。

人は地獄と極楽を行ったり来たりして生きています。しかし、人は地獄を生きているとどのほうが多いのです。人が生きている間は、自分や家族の生活を守っていかねばなりません。その中にはどうしても他者への確執や不安も多々あるでしょう。しかし、自分の心が次第でそれらを少しでも減らすことは出来ます。どうしたら、少しでも多く極楽浄土を感じながら生きていけるか。その心を説くのが親鸞聖人の教えなのであります。

## わたしと小鳥と鈴と

わたしが両手をひろげても、  
お空はちとも飛べないが、  
飛べる小鳥はわたしのよう、  
地面をぐぐたをはやくは走れない。



わたしがからだをゆすしても、  
きれいな音は出ないけど、  
あの鳴る鈴はわたしのよう、  
たくさんうたは知らないよ。

鈴と、小鳥と、それからわたし、  
みんなが一つ、みんないい。

## お魚



海の魚はかわいそう。  
お米は人につくられる、  
牛はまき場でかわれ、  
こいもお池でふをもらう。

けれども海のお魚は  
なんにも世話にならない  
いたずら一つしないのこ  
こしてわたしに食べられる。  
ほんとに魚はかわいそう。

いかがでしたか？誰でもみんなかけがえのない「いのち」を生きていくのですね。人間だけ特別ではないですね。

隆文

秋の永代経 23日(土) お参りに来てね。  
学習会・光受寺喫茶再開します。  
新聞原稿募集中！(旅行記・趣味・俳句・日ごろの思い等何でも可。よろしく。)